

白金蔵

三月号



平成25年3月発行 第25号

白金叢定例句会案内

月例句会報(12/3/15名欠投句会兼題春の水、受験)

四月十九日(金) 12:00~15:00(アビスタ第一和室)

兼題:枝垂桜、蜂

四月三十日(火) 東京駅・丸の内吟行句会(別案内)

五月十七日(金) 12:00~15:00(アビスタ第5学習室)

兼題:柏餅、夏場所

六月二十一日(金) 12:00~15:00(アビスタ第一和室)

兼題:五月雨、桜桃忌

枝垂桜、蜂の参考句(四月十九日分)

しだれ櫻觀音堂を入れて咲く

夜の枝垂櫻方里をつめたくす

天蓋のしだれざくらに立ち眩む

吹かれいで吹かれしりぞき糸桜

人刺して足長蜂帰る荒涼へ

てのひらに蜂を歩ませ歓喜仏

土曜日の王国われを刺す蜂いて

狂ひても母乳は白し蜂光る

花鉄きのうの蜂にまた出会いう

長城足下養蜂家族がいるわいるわ

養蜂一家土地神に伏し山に伏し

蜂追ひし上着を肩にして歩く

中嶋秀子

瀧澤和治

綾野道江

後藤夜半

三橋鷹女

金子兜太

寺山修司

平畠静塔

花谷和子

金子兜太

松本勇一

横山白虹

両の眼に春の海ためモディリアニ
雪しまき受験子の列攫ひけり
亀子亀子亀孫亀背に日永
春の水コンクリの溝音たてて
抱き合へる背俯き受験の子

増田陽一

爛れたる春月載せてわがテラス

手賀沼に鳥疎らなり春疾風

受験の児枳殻垣に触れゆけり

遠富士の反射眩しく受験生

醉ひ醒めの蛇口にたまる春の水

増田悦子

風のため電車のとまる春の川

飯田孝三

風強し遠くなりたる受験の日

春の水たたえて沼の目覚めたる
すすめ鳴く我にもありし受験の日

菜を洗ふ厨の水も春の水

受験生蒸気機関車にて参る

雛人形皆白面がおそろしき

春の水渋民村を流れけり

龜ぐもり砂町銀座人通り

春の日や惜命の杖横たはる

光成高志

御殿場の踏切渡り春うらら

ミニ電車花から出でて鉄橋へ

河津桜早かつたと言いくぐりける

笑顔なき目は点となり受験生

おひな様ずらり並んで空青し

青木啓泰

受験期に使いし行火藏開く

春一番黄砂PMまぎれ来る

露のとう甚兵衛さんに貰いけり

春の水せせらぎに出て速くなる

春の水遠くに筑波水笑う

吉羽多美子

いつの間についてくる猫春の宵

受験子に産みたての卵届きけり

啓蟄や色良き朝の卵焼

神の池鯉の口あく春の水

春水や少年飛むで水たまり

単語帳持つて咀嚼の受験生
春愁や花魁のごと高き靴
迂闊にも片足浸かる春の川
御手洗に白き手拭春の水
先生を囲む寄せ書き猫柳

光
みち

杉浦弥栄子

春の水せせらぎに出で速くなる
春一番黄砂 P M まぎれ来る
受験期に使いし行火藏開く
雪しまき受験子の列攫ひけり
すすめ鳴く我にもありし受験の日
受験生ママ泣かないでと肩を抱く
春の水コンクリの溝音たてて
春の水たたえて沼の目覚めたる
受験の児枳殻垣に触れゆけり
春愁や花魁のごと高き靴
亀子亀子亀孫亀背に日永
春の日や惜命の杖横たはる
逆白波なき隅田川茂吉の忌
春の水岸辺の花を映しつつ
いつの間についてくる猫春の宵

陽一 悅子 陽也 陽也 陽一 高志 悅子 多美子 正美 幸一 高志 孝三 みち 陽一 悅子 孝三 正美 悅子 孝三 // // //

一句鑑賞

手を入れて手を押す力春の水

迂闊にも片足浸かる春の川
朝日受けガラスに木々と鳥の影
遠富士の反射眩しく受験生
春の夢さめて可笑き寿
籬人形皆白面がおそろしき
見つけ出し受験番号目に涙
白梅に紅梅遠き孔子廟
神の池鯉の口あく春の水
御殿場の踏切渡り春うらら
ミニ電車花から出でて鉄橋へ
受験期の孫は遠くの三重に住む
愛らしきとどめおきたい籬祭
酔ひ醒めの蛇口にたまる春の水
春水や少年飛むで水たまり

多美子 陽一 正美 陽也 弥栄子 多美子 幸一 正美 高志 幸一 陽一 陽也

春の日や惜命の杖横たはる
逆白波なき隅田川茂吉の忌
春の水岸辺の花を映しつつ
いつの間にについてくる猫春の宵
風のため電車のとまる春の川
霾ぐもり砂町銀座人通り
爛れたる春月載せてわがテラス
縁側で四月の旅行打合せ
笑顔なき目は点となり受験生
朝日受け若葉きらめく日々とな
風強し遠くなりたる受験の日
手賀沼に鳥疎らなり春疾風

手を入れて手を出す力春の水
豊かな春の水である。野川は水嵩が増し、暖かくな
るにつれ、雑魚や小海老が水面をすいすいと走るのが
見えたりする。灌漑用水路は滔滔と流れている。つい
手を入れて見たりする。水中の手を広げてみると手を

押す圧力を感じる。ああ春の水だなあと思う。春の水の季節感を触感で捉えた私好みの句です。10cmの深さの水圧は、何。パスカル?などと換算するなんていうのは、もう考えなくていいのだ。

春の水遠くに筑波水笑う

啓泰

この春の水は啓泰さんお住まいの霞ヶ浦の水である。しかも水笑うとも云つてよい、さざめいている春の水である。以前紹介したが、美浦村という美しい名前の村は霞ヶ浦湖畔にある。帆引き船などが出ておれば水笑うであろうと思われる。

両の眼に春の海ためモディアニアニ

孝三

モディアニアニは、ジャンヌをモデルに絵を描くが、完成したジャンヌの肖像に瞳は描かれていない。薄いブルーの両の眼は春の海をためていてる如くであつた。「本当の君が見えたら、瞳を描こう」と誓う彼。

受験の児枳殻垣に触れゆけり

陽一

野田市の茂木家の分家に高い枳殻垣がある。受験の頃には、そろそろ白い花が咲き、秋には蜜柑のような果実をつける。枝に棘がある。茂木家の枳殻垣は防犯目的なのかなと思った覚えがある。受験生が枳殻垣に触れて行つたという所作に、何か鬱然した憂いを感じて選をしてみた。作者の陽一さんから、茂吉の歌が発

啓蟄や色良き朝の卵焼

多美子

春光のかがやきが増す、啓蟄は朝の食事風景である。黄金の卵焼なればの、俗談平話「色良き」が奏功し、リズム明るく、陽気が弾む。巨人大鵬卵焼は、戦後昭和の淫刺期の合言葉だが、そんな時代をふと思う。季感が溢れ、カラフルな一句である。

縁側で四月の旅行打合せ

飯田孝三
陽也

この頃の家屋は大方縁側とは無縁である。もつとも都会でのこと。たしか森繁久彌だったか、「心に縁側をもとう」と言つていた。何しろ、刻々お金の値段さえ変わる世の中である。チャップリンの『モダンタイム』も顔色なしだ。さて、ほのぼのと春の日があたる縁側で弥生は花の旅の相談。行先はどこぞの温泉かな、お供に一人、二人?あかんあかん、鬼ヶ島の鬼征伐じやない。

せられたので驚いた。「逆白波」の幸一さんの茂吉忌の句を鑑賞した後だつたので、偶然とは言え、その日は斎藤茂吉の歌が二首披露された。「たまたま手など触れつつ添い歩む枳殻垣にほこりたまれり」(赤光のM44年うめの雨の二十首中にある。)

菜を洗ふ厨の水も春の水

悦子

いつも厨で水を使う主婦の指先が、春の訪れをまづ知る。すると、ふつと水温む産土の山河を思い浮かべるのだ。雪解け水が河川湖沼を満々と潤す、すなわち「春の水」である。思いは厨を出て、万象躍動する宙の生気に焦がれる。手許に濯ぐ菜の緑が目に染みる。

この雛は知れり江東火の十日

幸一

下町の旧家では、江戸以来の雛人形がよく受け継がれていた。もっとも、殆どは昭和20年3月10日、東京下町大空襲で焼失してしまったが、「この雛」は、辛くも難を免れたのである。空襲は、一夜にして江東を中心下町一帯を焼き尽くし、十万もの人命を奪った。雛は、その劫火を生き延びた者だけが知る苦しみを、双の眼に刻んでいるのである。淡淡、端整な一句に秘める悲しみは深い。上五「は」は、即ち、今やそれを知る者は少ないが、この「雛」は知っている。作者も空襲の悲惨を実地に知る一人に違いない。

受験生蒸気機関車にて参る

高志

ナンダサカコンナサカーシュツボシユツボシユツボボー蒸気機関車である。何やら、受験生の踏ん張り、意気込みに通い合うではないか。SLなんちうのは、音が上滑りしていくねえ。強勢「にて」の根性が又い

い。どつこい、男はそうでなきや。一転、「参る」が軽妙だ。その飄逸ぶりが心憎い、余裕綽々、首尾上々請け合いである。今では、どこへ行つてもこんな場面に出くわしはしない。回想の一句である。

貴句断想V（24号分）

武者昭七

寒明くるなほしばらくは生きたしと

多美子

生きるということはどういうことかと時々考へる。未知の世界から雪崩れてくる時間という階段を一步步々々異次元の世界へ向けて上り詰めていくことではあるまい。それは登山家が氷の斜面にステップを刻みながら頂上に向つて体をせり上げていくのに似てはいないか。ここと体を支える足場が必要なのだ。正確な言い方は忘れたけれど太宰治のエッセイの一節に「新しい浴衣地を一反貰つた。生きていいこうと思った」というようなのがあつたと思う。（そんな短い一行にも当時は感動したものだ）巡つてくる自然の営みやら人情やらが萎えかけた生きる意欲に火をともしてくれることがある。「寒明け」も自然が用意してくれた生への一つのステップであり、次にはやがて来る「春分」が、その次には「清明」がまたステップとなつて足元を支えてくれるだろう。つましくやさしい願いを、大半を占める仮名表記が演出している。どうぞ元氣で。

ひしめきて両手突き上げ豆つかむ

正美

「ひしめく」「突き上げ」「つかむ」と荒々しい動詞を重ねて、豆まきに熱狂する群衆のほとばしるような熱気を見事にとらえた。「豆をつかむ」ことは健康や幸運をつかむことでだし、それは真剣に「両手を突き上げ」てこそそのことであり、世間の誰もがねがうこと。だからこそそこに「ひしめき」がうまれる。

銀河系までゆく気の鱗捕えらる

啓泰

サヨリの干物は喜んでたべるくせにそのサヨリがこんな漢字の持ち主とは恥ずかしながら知りませんでした。それでも何ともその姿には似ても似つかぬ複雑怪奇な字形ですね。銀灰色に光る鋭くスマートなあ細い体は中天に架かる銀河の神秘なきらめきにかようようです。それなのに・・・。鱗の運命に投げられたまなざしは皮肉か同情か。(013・02・26)

ハガキ句管見（第二十六報）

飯田孝三

会場に沸き立つ拍手五月来る

終演。満堂の拍手である。一瞬固唾をのみ、期せず

して拍手が沸き起こり、忽ち満場にどよめく。その機微と勢いが直に伝わる。「沸き立つ」の手柄だ。湧き立つ」ではこうはいかない。上中の“はきはき”した響

きに続く結句、清濁力行音の力強さがいい。一頃、もて囃された「地下街の列柱五月來たりけり」(奥山まや)

ハガキ句二十六報(07/5/13)

湯の槽に浮いて菖蒲の色増せる

犬山と根尾谷の淡墨桜

犬山の夜山車のあかり揺れて雨

さくら旅根尾谷は水透きほり

梅林の風塊りて人疎ら

亀鳴いていろこの宮の日暮門

荷風忌のビニール傘を買ひにけり

ひばりのす夕爾見て川むこう

会場に湧き立つ拍手五月来る

息の合ふピアノ・オカリナ聖五月

「ひばりのす」朗読に芯四月尽

高く咲く鱗二の山の桐の花

百合子
敏子
リ
高志
リ

哲夫
孝三
リ
高志
リ

より、五月の気をじっくり捉え切る。ぼくは以前日比谷公園を最近に見下ろすビルに勤務したが、芽吹きから新緑の頃の大々の彩りと勢いは、出勤時と退勤時と

はまるで違う。「五月来る」を実感したものだ。

「ひばりのす」朗読に芯四月尽

高志

「ひばりのす」は木下夕爾『児童詩集』の一編。彼は俳句もやつたが、やはり詩がいい。清澄で透徹した感性の美は夕爾ならではである。芯の通つた朗読は素晴しく、皆夕爾の世界に引き込まれる。ひばりのす／みつけた／だれもしらない　あそこだ／水車小屋のわき／しんりようじよの赤い屋根のみえるあのむぎばたけだ　小さいたまごが／五つならんでいる／まだだれにもいわない

四月尽がよく響く。

高く咲く鱈二の山の桐の花

〃

ぼくは鱈二をほんの少ししか読んでいない。作品の世界も人となりもよく知らない。だから、この句の読み手に相応しくない。鱈二といえば、太宰治が芥川賞を懇願し叶わなかつた話（鱈二の受賞は直木賞、記憶違いだつたら御免なさい）や、作品では『黒い雨』がまづ思い出されるのだが、名利に動かぬ、地の温みをもち、心底純粹の人だつたのではないか。

「高く咲く」が鱈二の人物を思わせ、「桐の花」の純朴がいい。「故郷の山に向ひて言ふことなし故郷の山はありがたきかな」

息の合ふピアノ・オカリナ聖五月

敏子

ピアノは西洋の楽器。発祥の地は知らない。オカリナはイタリヤ生まれ、土を素焼きにした笛。いまは世界各地にひろまる。ぼくは、その音色にユーラシア、凡大陸の風を感じる。「聖五月」は聖母マリア誕生の月に因む。かつて、日本に五族協和を謳つた時代があった。が、それはそれとし、この句から、多民族共存、異文化交流の世を思つた。それは世界の誰もが願うことだらう。

梅林の風塊りて人疎ら

哲夫

「風塊りて」が早春の気韻を的確にとらえる。ただ、ぼくはの好みだが、「人疎ら」が余分。ために、眼目「風塊りて」が説明風に聞こえる。友人の旧作「梅林や鳥は一輝の速さもち」（高橋 司）を思い出した。

湯の槽に浮いて菖蒲の色増せる

妙子

「増せる」がうまい。エロスを感じる。「槽」の用字も周到。

（H. 19・6・16）

亀鳴いていろこの宮の日暮門

孝三

いろいろこの宮とは何ぞ。イロコはウロコの古形にして、魚鱗のように並び建つてはいる壮大な宮なり。その宮の御門は恐らく、日光東照宮の陽明門のやうに、日がな一日眺めても飽きない日暮門であろう。亀とて鳴くで

あらう。古事記の海幸山幸の神話から江戸時代初期の近世を経て、現代にまたがる壮大な句である。宮崎の青島神社にお参りした記憶、それに新木の鶴草葺不合神社には畠の地主の隣りである関係で時々お参りする。

(H. 19年記。高志)

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭第24号拝受しました。有難うございました。拙稿を三部程同封いたしました。俳誌にふさわしからぬ内容かと思いますが、同人の方の邪魔にならぬ範囲でご処理頂ければ幸いです。三好達治の詩は小生の若い時からの受唱歌で人生の旅情が感じられる点が好きです。愈々のご発展を祈ります。

(H.25. 2. 27 武者昭七)

白金葭二月号拝受致しました。益々俳句、俳誌盛り沢山、樂しみです。我孫子日記、松戸から水元公園とありましたが、ずいぶん歩いたでしよう。金町の方が近い？水元公園には幸田文が好んだ榛の木が沢山あります。近くには大岡政談しばられ地蔵もあります。樹木巡りで何回か行きました。

この所俳句に縁のない生活です。あれ程騒いだ地球温暖化のホッケースティク形の上昇がウソであること

がわかり、なぜ新聞は取り消しを大々的に云わないのかと思いません。「名画の個性」の講座の渡邊先生は大正十二年生れ、一年間身体をこわし四月から再開、あと五年間やると云われ学生？一同啞然としています。益々のご活躍を。（H. 25 3. 2 小山陽也）

梅がどこも満開になりました。十五日の例会出られなくて残念です。お言葉に甘えて短冊入れておきます。もし間に合つて加わらせてもらえた幸甚。皆さまによろしくお伝え下さいますよう。

(25. 3. 12 ひる 松村幸二)

今日（十二日午後）立石さん（石本事務所OB）鈴木さん（佐藤武夫OB）とのオシャベリの会です。お二人とも一病抱えてお元気です。立石さん83才？東大卒、鈴木さん77才日大卒昭和三十五年頃からの友です。未だに二人から「ハッパをかけています。皆さまの益々の御活躍を祈ります。（3. 13. 小山陽也）

光成高志様 いつもお手数になつております。二月号にて大変心ある解説、それに小生のゴタクを採録下さいまして只々恐縮であります。貴重なる誌面を割いての掲載もうしわけございません。お礼申し上げます。さよりの句も温情ある捉え方鑑賞で恐れ入ります。ありがとうございました。ご自愛下さい。

つくばへお勤めしていたことはお聞きしておりますが、茨城ナマリは出でてしまいます。課長出世は学歴ありのナマリ無しでしようかね。とり急ぎ。これから3／13水つくば行き。つくば泊りとなります。大きな赤鳥居の下のホテルへ。もし、この稿間にあわぬ時は、ボツにかけつこうです。句は残りますからね。

(H. 25. 3. 13 水 am 青木啓泰)

四月三十日（火）吟行のお葉書頂きました。前々から心機一転のため半日位光成さんと共に俳句づけの日々をと思っておりました。是非参加させて頂きたいと思ひます。皆様と御目にかかるだけで十分です。これで四月は上中下旬と楽しみができました。ありがたいことです。当日好天気であればさらにお良いのですが。よろしくお願ひ申し上げます。

(H. 25. 3. 14 小山陽也)

受贈誌（三月号）

昭和のひと日選ぶとすれば敗戦日（飛行雲66号 駿河岳水ボージョレ・ヌーボー割り勘で買ふ記者クラブ（〃）〃 真つ黒の魚網の捨場草萌ゆる（彩109号） 平野ひろし 終の地の声（じゆんじゆん）と春の鳴（〃） ベンチより切株がよし日向ぼこ（〃） 佐藤恵子

日向ぼこ霸氣も毒氣も消え失せて（〃） 河端不三子 廃高炉影は冥界夕月夜（〃） 工藤直子 燈下親し神々親し古事記読む（〃） 相田敬明

俳窓評論纂

*松村幸一さんから松村蒼石のことを書いた「夏草」投稿文をもらつた。蒼石自筆の短冊も戴いた。同姓なのは親戚筋に当るからである。幸一さんの父親と従兄弟に当るそうである。幸一さんは、その関係を「涙の谷」と題して最近「屋根」（H. 18年8月）に投稿され、何もかも書かれておられる。晩年の蒼石と幸一さんは何度か親しく会話をされたのであつた。以下、「夏草」へ掲載された文章（昭和55）を要約して紹介する。

蒼石の「露のむかし」という自伝的散文がある。絹織物の問屋での見習奉公の日々の描写は、明治の京の町の商人たちの有様が詳細にまた風情豊かに書かれてあり名文である。次の句は古典的名品である。秋耕のもう乳垂るる嫗かな（昭3）いとし子の耳ささやきも春夜かな（昭10）ひもすがら日は枯草に猫柳（昭16）濡れ巖のしののめあかり蛇苺（昭20）

雪山の後ろにまはり遅日光

(リ)

特に「濡れ巖の・・」の句を飯田蛇笏は、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」と並べて「雪を銀碗に盛る」底の仏意において両句相ひとしいとまで絶賛した。これらの句を生んだ背景を幸一さんは身内ならではの逆縁の蒼石の心情を汲み取つておられる。野分して強かりし母恋ひわたる

(昭50)

これは、母恋の思いに耐えかねて、一度だけ歯痛を偽つて母の元へ帰つたことがあつた。母はそれを知らぬ振りして歯痛の呪い治療をする。少年蒼石は母の仕草を追いながら、母親の万斛の苦衷を黙つて諾つたのだ。

ときかけて木の葉燃しをり師を忘る

(昭和54)

蛇笏に師事していたが、蒼石くらい蛇笏の俳風に遠かつた人はない。蛇笏のあの情熱、怪異、浪漫、自我、非情、土着、剛毅、高踏等々の側面は、蒼石に無縁の世界だつた。

われはほそみの句をもて蛇笏忌を修す

は自己認識を的確に語つてゐる。

きさらぎは浮寝の夢のしどろなり

(昭53)

浮寝鳥昼は水かけろふと棲む

丸山哲郎はかつて「薄明に円光を負う」と蒼石を

評した。蒼石淨土という言葉もあつた。両評ともゆるがない。幸一さんは蒼石俳句を敬慕しつつ、永い間、忍従に徹し諦念に徹し、いきづく命を抑えに抑えたあげくの静謐と謹直と低徊の相が物足りなかつた。しかしこの時の幸一さんにやつと蒼石が見え出した。蒼石がどうしてあのような煉獄の痛苦を梃子として慈潤に充ちた燻し銀の寂光世界を紡ぎ出したかのディアレクティーケが少しずつ読めてくるような気がするのだ。「浮寝の夢のしどろなり」とは絶つても絶つても絶ちきれぬ現世が九十余歳の今も搖曳していることの証である。

水底にしじみがあそぶ桃の花

(昭52)

裏日本に西日は永し小鳥引く

(昭54)

つぶさなるささやき恋の水馬

〃

いつてつに茎をたのみの曼珠沙華

〃

以上である。その他、「屋根」に投稿された隨筆「松

村蒼石」(平8)、同「涙の谷」(平18)は幸一さんと

蒼石の逸事が詳しく書かれている。鷗外が文末によく

書いている「暗愁催す」という感想が沸きあがるが、

翻つて、このような文芸に親しむ身内をもつて実人生において邂逅をなされた幸一さんは幸せと云うべきではないかと思う。かかる幸ありと思想います。これが、筆者の今の

感想であります。

補追：幸一さんの「夏草」500号記念論文第一席作品「写生そのままと写生離れ」—長塚節「土」の条件—を昔貰つたものを持っております。これを読み今回の原稿を熟読しまして、ほんとに、幸一さんは、現代に少ない読書人と思ひます。

* 22号にて石原八束のことを少し紹介した。私の東京俳壇での八束選の句を少し左に書く。

岩礁に立つも若布の根本見ゆ

郭公の啼く度遠くなりゆけり

青田中御陵の白き鳥居立つ

霧晴れて次第に海の青さ出る

鰯雲犬吠崎の上通る

鎌足の旧居銀杏今も落つ

満目の青田青土堤にて堰かる

リヤカ一の水塊道に滴れる

霞ヶ浦蓮田の風に帆が動く

能登瓦光り鳥威しも光る

舟虫や吾が歩めば皆逃げる

コスモスは根強き故に風が好き

関ヶ原陣地の裾の稻を刈る

寒林を突き出しクレーン向き変はる

聞こえくる餅搗く音に馳せ帰る

顔そむけ寄りて餅焼くとんど焼

梅の咲く前は枯色濃くなれり

鮫鱗の鰯を銜え売られゐる

水を蹴り目高は音に直ぐ曲る

結局選ばれた句は以上で全部であつた。リゴリズムに叶つた句が取られているようである。この点、誓子先生と共通するけれども、これらは誓子先生の選に漏れた句である。誓子没後二年で八束逝去。平成二年から六年まで四年間見ていただいたことになる。

*「彩」合同句集(二十周年記念(4))が出た。平野ひろし主宰をはじめとして、72人の会員が参加されている。最初に二ページのみに、「俳句に対する姿勢・態度について」と題されて、主宰の信ずるところを序に代えて述べられてある。43年間師事した山口誓子先生に一番教えられたことを五ヶ条に集約されて掲げ、主宰の生の考え方を持つて、誌友に説かれてある。筆者もこの流れにあり、皆合点が行くものだ。五ヶ条とは次のものである。

① 即物具象(物に即して象を真はす)
② 寄物陳思(物に寄せて思いを陳べる)
③ 感動を第一に
④ 全ての物に愛の心を

⑤ 伝統に於ける俳句の創造・進化

特に五番目の創造・進化について、染色家の志村ふくみ氏の本の中に語られている、「伝統とは日々新しい闘いを続けていて、日々成長するものである」と、更に芭蕉の「かりにも古人の涎を舐る事なけれ、四時の押しうつるごとく物あらたまる。皆かくの」とし「と言つてはいる」と述べられている。

俳句の基本である写生について、島崎藤村の心の働きがなくてはならぬこと、それに斎藤茂吉の「実相観入」の実体を述べておられる。「写生は第一に物をよく観ること」。第二に物をよく記憶することだ。記憶は蓄積、培養である。「現代の事物を現代の心情で作るのが現代俳句である」。教えられた言葉は、ゴシック体で記述されるという心配りをされた簡潔にして要を得た俳論である。

わが影のだいたらほつち初日の出

平野ひろし

鬼やらひわが体内の真暗がり

山峡の底に街道桐の花

〃

節分会袋菓子撒く塵紙撒く

相田悠紀子
相田敬明

苦瓜の風のふくらみカフエテラス
英字新聞押へに青き楓櫨置く

水温む三拍子にて米を研ぐ
小島良子さんから「増補俳諧歳時記栢草」江戸曲亭

主人纂輔 蘭亭青藍増補 を拝借した。冬之部の江戸時代の歳時記である。中の芭蕉意の項に、支考、許六、藤堂家藩竹坊、惟然などの手記が十頁に涉りかかる。非常に貴重な文献があるので、読むのに苦労するであろうが、読み解いてみたい。

エッセイ

三好達治を読む

武者昭七

春の岬旅のをはりの鷗どり

浮きつゝ遠くなりにけるかも

いまさら引用するのも気が引けるくらいによく知られた詩だ。昭和二年、作者二十七歳の春、伊豆湯ヶ島に結核療養中の親友梶井基次郎(当時二十六歳、ともに旧制東大在学中、五年後死去)を見舞つて後、下田から沼津へ出た船旅に想を得た作だという。伝統的な短歌形式の「うた」といわれるけれど、五音、七音の組み合わせの生む流麗で典雅なリズムは三好の終生愛好したもので、明るく開けた春の海の情景にふさわしいけれど同時に、こは季節と人生の春愁とが共に深い陰をおととしている。

船上からの眺めである。病身の友のもとに心のこしたまま我が乗る船は遠ざかる。船につれ岬も、波間に浮んだ鷗もまた遠ざかる。「旅のをはりの鷗どり」とは、春、遠い

北国からの旅を終えて水に浮ぶ鷗たちであり、それはまた新しいさすらいの旅に立つはずの永遠のさすらいびとの象徴であり、同時に船上の作者自身の象徴である。自分も、岬も、鷗どりもいっさいが、春光あまねき真昼の海を波のたゆたいに身をまかせながらいま遠ざかっていく。旅の悲しみと遠ざかりゆくもの、失われて行くものへの愛惜の思い。流浪と喪失の悲しみこそ漂泊者としての三好が終生歌い続けたテーマであった。

作者は後年つぎのように歌う。

遠き日

十とせあまりも遠き日に われはも何をうしないし
なつかしき伊豆の浜べに 鷗どりうかびただよふ
見つつみて今しさとりぬ われはも何をうしなひし

「鷗どり」(昭和十三年)

十年前のあの日、鷗どり浮び漂う伊豆の海に自分は何を失つたのかを今こそ身に沁みて知つたというのである。胸を突き上げる深い喪失感と取り返すすべない悔恨とは生涯彼をとらえて離さぬものであった。

(0120. 03. 01)

芭蕉のかるみ以後 (24)

光成高志

良忠の嫡子良長が寛文六年春に生まれる。後の蕉門

の探丸である。良清は摘孫を抱くことができて家の安泰を願つたことであろう。それも束の間、良清にとつて、最も大切な嗣子良忠が、この年四月二十五日、二十五歳で早世してしまつた。良清六十六歳の高齢であり、長男次男を失つており、さらにこの不幸なのであつた。武門の慣習として一日も嗣子をゆるがせにできない。別家していた弟の良重を本家に戻し、兄嫁の小鍋を室として嫡子とした。時に良重十八歳、小鍋二十歳であった。良忠の七七忌に当る六月十四日には、遺髪に位牌、日牌を添えて、高野山報恩院に納める使者に特に松尾忠右衛門が選ばれ紀州路さして旅立つた。若き芭蕉、宗房の心境はどんなものであつたか。人生の慘さは無論、どうにもならぬことがあることをいやと云うほど知つたであろう。もののあはれを認識した一事であつた。高野山から帰つた宗房は、仕えるべき主を失つたことになる。良重には別家から復して蹤き従つた家臣団がおり、良長はいまだ襁褓の中にあつたから、仕官の道は閉ざされたも同然である。宗房は既に二十三歳になつており、今まで培つてきた学問を生かす俳諧の道で身を立てるより進むべき道はなかつた。赤坂の生家には兄の半左衛門夫婦と母親と妹がいた。藤堂家の録を離れるとなると、直ぐに兄の厄介に

ならなければならぬ。後の元禄三年、芭蕉四十七歳の時、猿蓑集卷之六に推敲に推敲を重ねて書いた「幻住庵記」の末文にある「つらつら年月の移り来し拙き

身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも・・・」と考えて悩んだのはこの時であつた。それでは、俳諧の道を歩んで来た甲斐がない。蝉吟に仕えたのは無意味になる。もはや、好きな道を歩みたい。俳諧を作つてはいる

時の夢中になれる、物に憑かれてはいる吾を自覚して、これこそがわが道と思つた。俳魔といふものがいるものなら、既に宗房は俳魔の翻弄を蒙つていたのではないだらうか。時を忘れ無心になり、俳魔の翻弄に身を任せられる人は天才である。「たどりなき風雲に身をせ

め、花鳥に情を勞して」既に生涯のはかり事になつてゐる俳諧であつたのだ。良忠の残した俳諧の稿の整理も宗房のつとめであつた。恐らく、良清の要請もあつたであらう。蝉吟在世からその死後も、如意宝珠（寛文九年）、大和巡礼（同十年）、藪香物（同十一年）時世粧（同十二年）に入集され、宗房は伊賀上野宗房として名が知られるようになつていつた。

たんだすめ住めば都ぞけふの月 いが上野宗房 寛文六年夏に京で詠んだ句で、翌年の「続山井」に

我孫子日記

2／20 S.O.A. 2／24 日本橋、六本木。2／27 S.O.A. 3／5 京橋。3／6 S.O.A. 3／8 * 萱吟行句会（砂町石田波郷記念館）。3／13 S.O.A. 3／15 定例会。

*春塵や砂町銀座人に酔ふ 敬司

砂町銀座若布スープとナポリタン 敦子

波郷旧居春の大路をバスで行く

春の日や惜命の杖横たはる 虎童子

轡りは波郷の雀かも知れぬ 高志

編集後記

今月は、山口誓子、斎藤茂吉、三好達治、石原八束、井伏鱒二、木下夕爾、無論芭蕉らの俳人・文人の名を打ち込んでいて、読書の記憶が蘇る。確認する。心が通じる気持ちになりました。考えることは楽し。

白金葭三月号（第25号）
発行所 我孫子市南新木 2・14・17
発行者 光成高志

入集されている。京での生活を志した証しではないか。